

1. 群馬大学オートプシー・イメージングセンター 10年間の活動と今後の展望

佐野 利恵 / 早川 輝 群馬大学大学院医学系研究科法医学講座
徳江 浩之 群馬大学医学部附属病院放射線診断核医学科

群馬大学大学院医学系研究科オートプシー・イメージングセンター（以下、Aiセンター）は、2008（平成20）年10月から稼働しており、ちょうど10年が経過したことになる。設立当時は死体専用CTを設置している施設は少なく、この取り組みが10年間も継続できたことを奇跡と感じている。以下に、その軌跡を総括する。

■ 設立とその後の経過

2008年4月に、群馬大学医学部附属病院新中央診療棟の建設に伴って最新鋭の診断機器が導入される運びとなり、従来使用されてきたX線CTが余剰のため、廃棄処分されることとなった。しかし、「まだ十分に使えるCTがもったいない」という素直な思いが本学に所属する診療放射線技師や放射線科医にあった。その一方で、X線CTを用いて解剖献体を断層撮影し、その画像イメージを見ながら同一献体の解剖を行うといった、新しい人体解剖実習を実施してみたいとの要望が解剖学や病理学関係者からも挙がっていた。さらに、海堂 尊氏の著書『死因不明社会』で指摘されている、死因究明に対する社会的な要求の増大もあった。

以上のような背景を踏まえ、医学系研究科長に対して、放射線科、病理学、解剖学、法医学などの教授からAiセンター設立の要望書が提出され（2008年4月12日付）、附属病院放射線科、医学系研究科病理学分野、解剖学分野、法医学分野、事務部の教職員の方々の協力によりAiセンターが医学系研究科に設置される運びとなり、2008年10月から、廃棄予定だった1列ヘリカルCT〔東芝メディカルシステムズ（現・キヤノンメディカルシステムズ）社製「Asteion/KG」〕を法医解剖室隣の旧病理解剖室（その当時は空き部屋）に設置して、Aiセンターの稼働が開始された。しかし、

当時の群馬大学事務局長からは「中古Aiセンター」と言われ、また、ほかの死後画像を取り扱っている施設では16列ヘリカルCT装置を用いて撮影が行われていたことから、ちょっと寂しい感じがするところであった。

ところで、その当時の他施設と比較すると、当Aiセンターには以下の特徴があった。

- ① 医学系研究科附属施設である（センター長は医学系研究科長で、医学系研究科からの経済的支援がある）。
- ② 運営委員会によって運営される（センター規定・運営要項が定められている）。
- ③ 死体専用CTを設置している施設である。
- ④ 放射線科医が読影に当たり、報告書を作成する。
- ⑤ 診療放射線技師が撮影に当たる。
- ⑥ 解剖学教育を支援する（解剖献体の死後画像の撮影、人体解剖実習に使用するiPadの購入援助）。
- ⑦ 法医解剖を支援する（解剖前の死後画像の撮影）。
- ⑧ 地域の死因究明を支援する（死体検案における死後画像の撮影、検案医師が死因を決定するに際し、参考にする死後画像の提供）。
- ⑨ 学内関係者の利用は無料
- ⑩ 学外からの利用は有料
- ⑪ 診療放射線技師の雇用
- ⑫ CT装置保守契約の締結
- ⑬ 群馬Ai症例検討会の支援
開設後には、依藤 宏機能形態学（解